

株式会社楽患ナース社長

岩本 貴さん

看護師・医療コーディネーター

岩本 ゆりさん

東京医科大学病院の産科病棟、東京大学病院の婦人科病棟や特別室・緩和ケア病室に勤務していたゆりさんが、2002年に病院を辞めて、NPO法人「楽患ねっと」を設立（現在は現副理事長）。03年、個人事業として医療コーディネーターを開業。07年、夫の貴さんとともに株式会社を立ち上げ

# 病気の不安を抱える患者を納得のいく医療選択に導きたい

医療の高度化・複雑化・専門分化が進むなか、治療方針・内容や病院選びなど患者本人が納得する医療を受けられるようサポートする「医療コーディネーター」。岩本貴さん夫妻は、中立的な立場から患者の相談にのるサービス事業を展開。医者も治療も自分で納得して選ぶ——そんな患者中心の医療環境を目指す

取材・文 小堂敏郎 写真 村山雄一

## 専門分化・多様化する現代医療に戸惑う患者たち

がんを告知されたという六〇歳代の男性は、面談の席で切り出した。「リンパ節への転移があるから手術はできない、という病院もあれば、自分はその病棟もあるのです」  
自分は手術すべきか否か——男性の迷いに耳を傾けて岩本ゆりさんはこう答えた。  
「ご自身で納得する結論を出すことです。そのお手伝いを私がします」

病気の不安を抱える患者と面談し、納得のいく治療や病院選びを中立的な立場の専門家としてサポートする。岩本さんは、二〇〇三年から活動を続ける「医療コーディネーター」の草分けだ。  
「その男性は企業の重役も務めて、ビジネスの現場ではアグレッシブな方でした。そんな経歴談もお話されるうちに『がんが体の中にあるのに、何もしないなんて、僕の性格からして許せない』と。私は、闘病には前向きな気持ちがあること

と、その一方で、手術した場合はいくつかのデメリットがあることも、合わせてお伝えしました。その男性が抱える問題を整理したうえで、次の一手へと道筋をつけるように支援したのです」

岩本さんとの二時間ほどの面談で男性は「手術します」と決心し、帰り際には笑顔も見せたという。

患者が望めば、岩本さんは病院へ同行し、主治医とのコミュニケーション支援も行う。診療を受ける前に、医師にどのように相談するかなど、準備を整えて出かける人は少ない。自分の治療にかかわることなのに、医師の説明が全然わからないと

いう、コミュニケーション不全も起こる。そんなことにならないように、岩本さんは、患者が医師に確認したいことなどを事前に整理し、診療の場に同席もして、両者の信頼関係ができるように支援するのだ。

このような岩本さんの活動の背景には、専門分化し多様化する現代の医療現場で戸惑う患者が増えている、という事情がある。患者は、医師の診断や治療方針の正確な意味を理解しようと思えば、専門的な知識や情報をもたなければならぬが、それには難しい医療用語から理解する必要がある。医師との間で、治療の核心に迫る会話ができる患者にな